

たかさき 薪能

第20回
たかさき薪能



第20回 たかさき薪能

日時／平成17年10月9日(日) 午後3時30分開場・午後4時50分開演

会場／城址公園庁舎前広場(高崎市役所前)(雨天の場合：群馬音楽センター)

主催／高崎市・社高崎観光協会 後援／高崎商工会議所

16:20 演目解説(20分)

吉水 哲郎

16:40 休憩(10分)

16:50 あいさつ・火入れの儀(15分)

17:05 仕舞(親世流)(15分)

高砂

藤波 重彦

松風

藤波 重満

善知鳥

松木 千俊

地謡

金子 聡哉

北浪 貴裕

藤波 重孝

小柳山浩二

17:20 狂言(和泉流)(25分)

演目解説

高崎経済大学非常勤講師

吉永 哲郎

狂言

「萩大名」

はぎだいみょう

萩の名庭園(客席が広々とした庭園に見立てられている)を見物に行くことになった遠国の大名が、庭の亭主の歌を所望された時の用意に、萩を詠みこんだ「七重八重九重とこそ思ひしに十重咲き出づる萩の花かな」という歌を太郎冠者に教わりますが、大名はこの歌をよく覚えられないままに出かけます。教養のない大名は、萩の庭園をほめそこなった上に、一首も

能

「鞍馬天狗」

くらまてんぐ

鞍馬寺くらまでらの東谷とうたにの僧そうが西谷さいたにから招待され、稚児たち(平家のこともち)を連れ西谷の花見を楽しんでいると、突然ひとり山伏が現れます。興をさまたされた僧は稚児たちとともに帰ってしまいます。あとに山伏に同情した沙那王(牛若丸)だけが居残ります。山伏はそれが沙那王であることを知って、その境遇を憐れみ、花見の友として京都の花の名所を案内します。山

萩大名

シテ(大名)

野村 萬斎

アド(太郎冠者)

深田 博治
アド(茶屋)

石田 幸雄

17:45 休憩(15分)

18:00 能(観世流)(75分)

鞍馬天狗

くらまてんぐ

花見 上原 葵

花見 手島 悠一郎

花見 下平 玲子

牛若 小早川 康光

前シテ(山伏) 川原 恵三

後シテ(天狗) 下平 克宏

ワキ(僧) 殿田 謙吉

大鼓 高野 彰
小鼓 森澤 勇司
太鼓 徳田 宗久
田中 義和同 (能力) 深田 博治
(木葉天狗) 竹山 悠樹後見 松木 千俊
藤波 重彦地謡 新江 和人
小楡山浩二 藤波 重孝
北浪 貴裕 小早川 修
木原 康之

19:15 終演

冠者はあきれて先に帰ってしまったので、大名は最後の七文字を思い出すことができず、大駈をかき入ります。貴族文化・京文化を踏まえ、指導者や権力者の教養の有無を問う狂言です。



るといい、平家を討ち滅ぼそうとする沙那王に兵法の奥義を伝授しようといつて、姿を消します。(中入り)武装を整えた牛若が待つところへ大勢の天狗を率いた大天狗が現れ兵法を伝授し、のちのちも牛若を守護することを誓います。名残を惜しみながら大天狗の一行は姿を消します。

山伏が謡う「あらいたはしや、御身を知れば、所も鞍馬の木陰の月、見る人もなき」の詞句は、古今和歌集の伊勢の歌「見る人もなき山里の桜花ほかの散りなむのちぞ咲かまし」を引きつつ、牛若の境涯を思わせる、情緒あふれる名場面です。